



抱擁

その美人がやってきたのは、よく晴れた日の午後のことだった。ちょうど、みるくちゃんと呼んでいる三毛猫を庭で遊ばせていたときだった。美人は、白い肌に黒のアイラインをくつきりと浮かばせて、複数の小さなほくろから独特な色気を放っていた。彼女は蝶の姿をしていた。

「ここはおたくのお庭でしょうか」

美人が、おれの耳元にきて、そう囁いた。はためいた羽が耳の穴に柔らかな風を送った。背筋に、小さな波が走っていくのを感じる。

「はい、おれのですが」

「あそこにある、木の葉っぱが、とてもおいしくて。わたし、ぜひあそこに卵を産み



たいと思っっているのです」

美人は、ふわりとおれの視界のなかを舞いながら、庭の隅にある子どもものの背ほどの木の方へ行き、また戻ってきた。みるくちゃんが、そのとき美人に気がついた。三色の毛玉を吐くために食んでいた草から顔をあげ、美人を見つめる瞳がぐうーんとまっまるになった。

「そこでなんですけど、この」

美人が、芝生に座り込んでいるおれの頭上に避難した。みるくちゃんが立ち上がり、おれのところへ走ってきて、おれの膝に真っ白な両手を乗せた。

「ねこさんが、くれぐれも、あの木に、近寄らないようにしていただけると」

膝にのぼってきたみるくちゃんを、両腕で抱えた。みるくちゃんの毛は薄く、さらさらとしていて、抜けにくい。背中 of 黒い部分が、陽の光を吸ってじんわり熱くなっ



ていた。美人は、おれの頭上からいちど高く舞いあがり、また目の前へやってきた。みるくちゃんの目は、がっちりと彼女に合わせたまま、逸らさない。ぴくつ、と身動ぎしそうな小さな体を、おれの腕で優しく押さえこむ。

「わかりました」

おれが言うと、美人は上機嫌に羽を揺らして木の方へ飛んでいった。しばらくの間、庭の隅にいる美人の羽づかいがおれの視界を甘くした。いい春日和のワンシーンだった。みるくちゃんが追いかけてそうになったので、おれは美人が産卵するのを見届ける前に、みるくちゃんを家の中へ連れて戻った。いつからあるかもわからない、名前も知らないおれの庭の木が、美人を助けた。まあまあ、いい気持ちでした。実を言うと、蝶の幼虫は苦手だったのだが。あれほど葉が生い茂っていれば、その中に紛れこんだ幼虫を見つけてしまうこともないだろうと思う。美人とルームシェアをしているよう



だな、と考えると、それはそれで悪くなかった。

みるくちゃんを庭で遊ばせた。美人が訪れてから一週間ほど経っていて、美人からの言いつけも正直なところ忘れてしまっていた。みるくちゃんが、例の木へ近づいた。おれもみるくちゃんの方へ近づいたとき、つるつるとした葉っぱの上に、不自然な塊があるのを発見した。よその子どもがおもちやを置いたのかと、一瞬疑った。しかし、塊がむにゅ……と動いた瞬間、おれの頭の中で爆竹がパカパカと火をあげはじめた。この字に体を曲げた芋虫だった。シマウマのような黒と白の模様に、毒々しいほどに鮮やかな赤の点々がついている。視界がちかちかと白くなった。おれは「うわあ！」と叫んで、手足をびくびくと震わせながら後ずさった。木から転げるように離れた。みるくちゃんが、おれの大きな声にびっくりして、体を少し縮めた。



「みるくちゃん、おいで」

みるくちゃんは、木から離れない。ただ目をまんまるにして、様子のおかしくなつたおれを見つめている。

みるくちゃん、みるくちゃん、と、何度も呼んだ。地面に手をつけて、半ば懇願するような形になった。みるくちゃんを抱きかかえてでも連れ戻したいが、あの木には近寄りたくない。みるくちゃんの体に、もし芋虫がついてしまったらどうしよう、と恐ろしくなった。この世界一かわいいみるくちゃんに。芋虫は、みるくちゃんの柔らかい毛を食べていつてしまうかもしれない。やがて、芋虫の中にみるくちゃんのすべてが吸収されて、みるくちゃんに二度と近づけなくなるかもしれない。みるくちゃん、と呼んだ。みるくちゃんは、犬ではないので、来ない。

みるくちゃんの体が葉につかないように祈っていると、もう探検は終わりましたと



いうように、のこのこと戻ってきた。おれはみるくちゃんの体を確認すると、ひつたくるようにして抱き、家の中へ投げこんだ。頭の中に、くつきりと芋虫のシルエットが残っている。全身が震えた。両腕の肌を爪で引っかいた。感触が思い起こる。ぐにゅ、というか、むに、というか。そんな。そんな音がしそうな。

ドーナツのスクイーズを指に嵌めたときだった。最大のトラウマが蘇った。おれが芋虫を嫌いになった原因の記憶だ。小さい頃、公園の砂場で遊んでいたら、指に何か柔らかいものが巻きつく感覚がした。なんだろう、と思って手をあげてみると、それは青い芋虫だった。おれの指に、ぐるりと、巻きついていて。叫び声をあげ、おれは勢いよく芋虫を片方の手で吹っ飛ばした。感触。ひんやりとしているくせに、やたら柔らかい。ひんやりとしているくせに、たしかに『いきもの』だった。くそ、おれの



指に、勝手にくつついてきやがつて。泣いた。悔しかった。まるで我がもののように、抱きつかれたのが怖かった。あの日から、芋虫が大嫌いになった。このあいだ、小さなドーナツのスクイーズが引き出しの中から出てきた。ぐにぐにと指で弄びながら、なんとなく穴へ指を嵌めると、あのと時の記憶が鮮明に湧きあがってきた。指が硬直し、ぶるぶると震えた。また、叫んで、ドーナツを吹っ飛ばした。すぽーんと抜けて飛んでいった。あの日、の芋虫も、ドーナツも、俺を針で刺すようなことはしなかったのに、得体の知れない恐怖をおれに植え付けている。俺にとっては、芋虫がおれの肌にくつつくより、カマキリに噛まれた方が遥かにマシだった。

美人が、おれに切なげな顔を向けている。蝶と人のあいだのような姿をしていた。くつきり描かれたアイラインの下で、まわりの暗闇と同じ色をした瞳をふるふると震



わせている。白い肌が淡く光り、輪郭を曖昧にさせている。目の下、唇の下、鼻の真上のほくろが、まるで星座のようだ。ベビーパウダーだろうか、やわらかな匂いをした粉があたりにきらきらと舞っている。大きな羽が、風といっしょにおれの肌を撫でる。ああ、とつい声が漏れる。おれは服を着ていなかった。全裸で横たわっていた。美人が馬乗りになっていた。黒いまつ毛をぱちぱちとさせて、そこから虚ろな光をおれに注ぎながら。

興奮をおぼえはじめたときに、美人のからだだが、急にぶくぶくと太りはじめた。柔く、さらさらとしていた肌が、膨張し、ゴムのようになる。黒く変色する。白い縞模様が生まれる。赤い、斑点が——芋虫の姿だった。大きい。おれに、馬乗りになったまま。そして、全身をおれにぴつとりとくっつけようとしてくる。

ひっ、と息を吸ったきりだった。しばらく止まった。そのあと、一心不乱に叫びつ



づけた。暴れるが、手足が動かない。叫んでいるはずなのに、おれの叫び声が自分の耳に反響しない。芋虫の肌に吸収されているかのようなうだ。芋虫のうちがわが、俺を喰らおうとしているかのように動く。いくつもある小さな指のような突起を、それぞれうにうにと動かしてみせる。目をかたく瞑った。視界は黒一色になったものの、感覚はより一層研ぎ澄まされる。芋虫が、覆いかぶさったようだった。冷たくて、やわらかい肌が、おれの皮膚に吸いつくように動く。細かい心臓がいくつも埋め込まれているような体だ。脈打っている。あ、あ、と叫びに近い喘ぎ声をあげた。おれの全身が、芋虫に、吸われている。余すことなく。快感は嫌悪へ。嫌悪は快感へ。芋虫だということのを忘れたり、思い出したりする。叫びはやまない。暴れることもやめない。その中で、失神に繋がるような諦めが微かに生まれている。そのかけらが、しかと芋虫の肌を感じている。人である誰かと触れあうより、ずっと、心地いいような。安らぐよ



うな。裏切りを感じさせないような。

目が、開く。強制的に。大きな芋虫の顔が、視界いっぱい広がっている。涙が出てきた。許してください、と命乞いをした。バチがあたったのだろうか。なんの罪も犯さない、むしろ弱すぎるまでのつくりである芋虫を、おれは極度に嫌悪している。そのくせ、蝶を愛している。神からの罰だ。童話によくある教訓だ。『ひとを見た目で差別してはいけない』といった類の。

芋虫は、おれのからだを吸い続ける。もごもごと、口のようなもので、胸元を漁る。重たい。息ができない。殺される。犯されるように、おれは、殺される――。

がくん、と体が跳ねた。空気がぴりつと肌に刺さった。汗ばんだ額。顔を少し上げる。胸の上で、みるくちゃんが丸くなって寝ていた。悪夢を見ていたようだ。深い呼吸を繰り返すと、みるくちゃんがその度上下した。ごめんね、と言いながら、みるく



ちゃんを脇に除けると、みるくちゃんは「むぎゅ」といったような声を出して、鬱陶しそうに耳をぱちぱちとさせた。

みるくちゃんを、しばらく外に出さなかった。木にも近づけなくなかったし、おれ自身も芋虫のことは二度と見なくなかった。とつくに羽化して飛んでいったかもしれないが、あの美人がいくつ卵を産んだのかがわからない。庭に出るのも怖くなっていた。

しかし、みるくちゃんは外に出せとうるさく鳴きつづけた。おれがテラスへ洗濯物を干しに行くと、「アー」といいながらおれのズボンに爪をひっかけた。正直、かわいそうだった。鍵のかかった窓を、爪で頑張つて開けようとする。キィ、キィと嫌な音が鳴るのだった。胸と耳を痛めるので、ある日、とうとう庭に出してしまった。



おれは例の木をなるべく視界に入れないようにしていた。少しでもみるくちゃんの木の方へ近づこうとすると、おれは必死にみるくちゃんの前に立って、止めた。

見たくないはずなのに、視線はどうしても木の方へ行く。目を細めている。芋虫を、探そうとしてしまう。まぶたの裏に、芋虫のすがたが浮かぶ。寒気が走る。みるくちゃん、が、ごろん、と砂まみれの地面に寝転ぶ。

ぼんやりとした木のなかに、白い影が揺れている。恐怖が、薄れた。はじめて、しっかりと木の方を見た。白い、影。蝶だった。あの美人か。いや、美人とは違う。美人より、弱々しくて、危うく脆そうな羽をしている。完全に開ききっていない、皺があるのを見て、ああ、羽化か、と気づく。打って変わって、釘付けになっていた。まっすぐだった白黒の縞模様が、稲妻のようにぎらぎらと広がっている。息づかいが聞こえる。浅く、しかしゆっくりとした。



みるくちゃんが、起きあがった。木の方へ目をやり、その美人へなりかけの蝶へ口ツクオンした。おれは、がっしりとみるくちゃんの体を掴んだ。みるくちゃんが、顔だけでおれを振り返って、おれの手を噛もうとした。無理やりにも、木の方へ行こうとする。

「みるくちゃん、やめて」

みるくちゃんを抱きかかえた。みるくちゃんが暴れつつ、唸った。それでも、おれはみるくちゃんを離さなかった。じつと、美人へなりかけの蝶に視線を注いでいる。同じ芋虫だろう、と信じている。

じわ、と羽が広がっていく。ぎこちない羽ばたきへの準備だ。うじうじとした動きが、芋虫だったことを思い起こさせた。頑張れ、と声に出そうになる。同時に、自分の都合の良さに嫌になる。おれは庭を貸したにすぎないし、面倒なんかもつばら見て



いない。芋虫のことも、きつと相変わらず、大嫌いだ。

おれの庭が蝶のクチコミで広がり、やがて美人で埋まるのを想像した。なかなかいいなと思ったあとで、その過程に、芋虫だらけの時期も存在することに気づく。それは、たぶん、耐えられない。お前で最後だよ、と呟く。ぐりぐりと動くみるくちゃん
んの頭から、乾いた土の匂いがした。おれはみるくちゃんを抱きあげて、うららかな春の陽射しの下をあとにした。